

国立国会図書館の資料とデータベース化

杉山時之(国立国会図書館)

SUGIYAMA Tokiyuki

1. NDL^(*1)とMARC^(*2)

国立国会図書館(NDL)がJAPAN MARCを世に送り出したのは1981年4月、今から13年前のことである。米国から10年の遅れをとるといわれた当時、日本語とコンピュータの間の壁を乗り越え、漢字で表現された書誌情報のMARC化は世界でもはじめてであった。国内はもとより国際的にも評価され、現在外国も含めて多くの図書館で利用されている。とくにそのCDROM版は1988年に刊行以来国内だけで1,000セットをこえる利用を数え、増加の一途をたどっている。600万冊を越える図書をはじめ数多くの資料を所蔵するNDLは、わが国の出版物を国の文化財として永久保存する反面、これらを情報源として広く利用できるように書誌情報のデータベース化に取り組んできている。情報社会に求められるだれでも、いつでも、どこからでも、どんな情報もアクセスできる情報環境の整備に向けて、第二国立図書館プロジェクト、通産省の電子図書館プロジェクトにおける中心的役割、IFLA^(*3)やISO^(*4)への積極的参加と貢献、国内はもとより各国の図書館との協力体制や技術交流など具体的な取り組みが進められている。

2. NDLの資料とデータベース化

NDLが所蔵する資料はその資料管理システムにおける品目によると約30種類に及ぶ。図書では大きくふたつに分けられ、和漢書約420万冊、洋図書約200万冊、合計620万冊となっている。和漢書には日本語の出版物のほか中国語および朝鮮語資料が約26万冊含まれている。中国語および朝鮮語以外の言語で著された図書は洋図書に含まれている。逐次刊行物としては日本語による雑誌と新聞約9.2万種類、中国語および朝鮮語による雑誌と新聞約4,050種類、それ以外の言語によるいわゆる洋雑誌と新聞約4.5万種類を所蔵している。そのほか地図、レコード、楽譜、絵画、写真、ポスターなど出版物と名のつくものは網羅的に収集保存し、わが国の文化遺産として後世へ残す役割を担っている。

これらの資料の書誌情報をデータベース化する事業は、コンピュータにより目録や索引の編集を開始した1970年代初頭から継続的に行われ、その成果がMARCやCDROMの形でサービスされている。さらにオンライン情報検索サービスにより各省庁、国会関係機関、都道府県立および指定都市立図書館など国内の約150機関にこれらのデータベースを提供している。

和漢書のうち日本で出版された図書いわゆる和図書のデータベース化の進捗状況は表1に示す通りである。典拠データのMARC化も整備されつつあり、この秋から一部を頒布する予定である。先ず人名典拠のうち昭和28年以降に受入整理された資料に対応する典拠データ約28万件を対象とし、明治期、昭和前期、大正期、江戸期以前の古典籍の分がこれに続き、順次件名典拠、出

版者典拠と範囲を拡大していく計画である。

雑誌の記事に関する索引データは MARC 化はしていないが CDROM の形ですでに1990年から1993年までの約43万タイトル分を今年7月に頒布している。今後はそ及分として1975年から1989年までの分を順次リリースする予定である。科学技術分野と人文社会分野を合わせて主要な約3,300誌を対照に採録しており、とくに人文社会分野関係からの採録はこのデータベースの意義を高めている。

表1 NDLの和図書資料のデータベース化状況

対象図書の出版年区分				J/MARC	CDROM	件数	
最新版	平成	1994	H6	S56.4	S63	100万	
		}	}				
	1989	H1					
	昭和	1988	S63				
}		}					
		1977	S52				
遡及版	昭和	1976	S51	H1.7	未定 (H7~H8の見込)	20万	
		}	}	}			
		1969	S44	S57.8			
		}	}	}			
			1968	S43	H4.10	未定 (H7~H8の見込)	17万
			}	}	}		
			1956	S31			
			}	}	}		
		和	1955	S30	H5.5	未定	10.5万
			}	}	}		
			1948	S23			
			}	}	}		
		1947	S22	H8中の見込	未定	20万	
		}	}	}			
		1926	S1				
		}	}	}			
	大正	1925	T14	H9中の見込	未定	10万	
		}	}	}			
		1912	T1				
	明治	1911	M44	H6.3	H7.40予定	11.5万	
		}	}	}			
		1868	M1				
	江戸以前	1967	K3	H10中の見込	未定	6万	
		}	}	}			

(網かけ部分は頒布済み)

3. NDL のデータベース化と今後

MARC に始まった図書館資料のデータベース化は書誌ユーティリティ^(*5)やオンライン情報検索サービスによってその有用性が高まり、さらに CDROM 化によって情報アクセスの機会が個別化され普及の度合いが早まっている。その結果利用者のニーズは直接求める情報にアプローチできる全文情報へと向かいつつある。今後の姿として、書誌情報そのものの価値に疑問の声を耳にすることもあるが、全文情報への効率よい検索情報としてその役割は今まで以上に重要になるに違いない。

NDL では日本語資料のデータベース化にほほめどがついたこともあり、中国語および朝鮮語の資料の書誌データベース化が課題として浮かびあがっている。それには文字セットの対応が必要であり、国際標準漢字コードが先行する状況のなかで、JIS およびハードウェアベンダーの対応が望まれる。もしこれらの対応が遅延するようであれば、わが国の図書館界と情報サービスの世界で統一した方向を打ちだし、標準化を進めることも必要であろう。関連機関の相互協力が実現のカギとなるのではあるまいか。

【注釈】

- (*1) National Diet Library: 国立国会図書館
- (*2) Machine Readable Cataloging: 機械可読目録
- (*3) International Federation of Library Associations: 国際図書館連盟
- (*4) International Organization for Standardization: 国際標準化機構
- (*5) 書誌情報を協力分担して作成あるいは利用するための図書館を結ぶオンラインネットワーク